

だ美  
よ術  
り館

contents

2011年NHK大河ドラマ特別展 「江」～姫たちの戦国～	[2～3]
平成22年度新収蔵品紹介	[4～6]
イベント報告	[7]
お知らせ・貸館情報	[8]
福井県立美術館 夏の展覧会案内	[8]

表紙：「崇源院宮殿」 東京・祐天寺蔵（「江 ～姫たちの戦国～」展）



2011年  
NHK大河ドラマ特別展



女の戦いは生きること



1.

会 期◎平成23年4/22(金)～5/29(日)  
主 催◎福井県、福井県立美術館、福井市、大河ドラマ「江～姫たちの戦国」福井県推進協議会、NHK福井放送局、NHKプラネット中部、福井新聞社  
制作協力◎NHKプロモーション  
協 賛◎ハウス食品、三井住友海上  
開館時間◎午前9時から午後5時まで  
休 館 日◎5月9日(月)・23日(月)  
観 覧 料◎一般1,200円(前売・団体1,000円)、大高生800円(前売・団体600円)、  
中小生以下は無料  
※団体は20名以上  
※身体障害者手帳所持者とその介護者1名半額(但し障害者手帳に介護印のある方)  
関連行事◎学芸員によるギャラリートーク  
4月30日(土)、5月21日(土) 午後2時より会場にて ※要展覧会チケット  
※会期中、展示替えがあります。

伯父に信長、義兄に秀吉、  
そして義父は家康…  
戦国のスーパーセレブ・江。  
ごう



3.



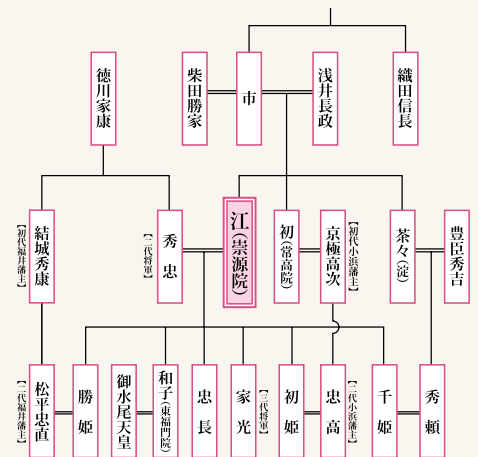


2.



5.

1. 「徳川秀忠室〔浅井氏〕画像〔伝〕」  
東京大学史料編纂所蔵（4/22～5/5展示）  
※江、唯一の画像。原本は京都・養源院蔵
2. 重文「浅井長政夫人像」  
和歌山・高野山持明院蔵（4/22～5/8展示）  
※江の母、市の画像
3. 重文「青井戸茶碗 銘 柴田」  
東京・根津美術館蔵（全期間展示）  
※柴田勝家が織田信長より拝領した茶碗  
福井県限定展示で初の里帰り
4. 長浜市指定「淀消息 京極高次宛」  
滋賀・知善院蔵（全期間展示）  
※江の姉・淀が、初の夫・京極高次に宛てた手紙
5. 福井県指定文化財「常高院像」  
小浜市・常高寺蔵（5/14～5/29展示）  
※江の姉・初の画像



江(崇源院)は元龜4年(1573)、近江の戦国大名・浅井長政と織田信長の妹・市の間に三姉妹の三女一長女は茶々(淀・豊臣秀吉側室)、次女は初(小浜藩主京極高次正室)として生まれました。生後間もなく父を、11歳の時には母と義父で越前北庄城主・柴田勝家を戦で失います。

その後しばらくして尾張の佐治一成に嫁ぎますが、秀吉の命により離縁、その甥・秀勝と再婚するも、すぐに死別してしまいます。そして文禄4年(1595)、徳川家康の三男で二代将軍となる徳川秀忠の正室となります。秀忠との間には二男五女に恵まれ、嫡男家光は三代将軍となり、五女和子は御水尾天皇に嫁ぎます。そして寛永3年(1626)、江戸城で54歳の生涯を閉じました。

本展は、2011年NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」にあわせて開催されるものです。江と彼女を取り巻く人々の遺品や歴史資料、約150点を展示、江の波乱にとんだ生涯をたどります。



4.

◎その他主な展示作品

- 重文「浅井長政像」  
和歌山・高野山持明院蔵（5/10～5/29展示）
- 「織田信長像」 狩野永徳筆  
京都・大徳寺蔵（全期間展示）
- 越前市指定「徳川家康・徳川秀忠・結城秀康坐像」  
越前市・龍泉寺蔵（全期間展示）
- 「江戸図屏風」  
千葉・国立歴史民俗博物館蔵（5/15～5/29展示）





1. 作者不詳 『世界図・日本図屏風』

《購 入》

日 本 画

1. 作者不詳 『世界図・日本図屏風』

(福井県指定文化財)

桃山時代後期 (各)132.0×389.0cm

八曲一双屏風、紙本金地着色

本作は、桃山から江戸初期にかけて制作された八曲一双の屏風で、西洋の最新知識や風俗を取り入れたいわゆる「南蛮美術」のひとつである。世界図は楕円形の中に、大西洋を中心とした形で描かれている。色分けされた陸地には山や川、建物等が地名と共に描き込まれ、海上にはスペインやポルトガルを起点とする航路が記されている。地形はかなり正確に描かれているが、オランダのオルテリウスが1570年に刊行した「世界地図帳」等を参考にしたのではないかとされている。

一方、日本図は周囲に金雲を配して描かれており、画面右上にあるのが北海道の一部、左上が朝鮮半島の一部ということがわかる。奈良時代の僧行基が制作したと伝えられる行基式地図を基にしているが、さらに実際のものに近い地形となっている。

世界図・日本図屏風の作例はかなりの数が確認されているが、桃山時代にまでさかの

ぼると、東京・個人本(重文)、福井・浄得寺本(重文)と長らく県内の旧家に伝えられてきた本作のわずか3例しかなく、そのうちの2点が福井県内で所蔵されていたということは注目すべきである。これらの3作は、形態や描写方法が極めて近似していることから、いずれも同一工房ないしは近い関係の絵師によって制作されたと考えられている。

《寄 贈》

日 本 画

2. 藤原正吉 『鷹図屏風』

16～17世紀 (各)129.3×49.5cm

六曲一双屏風、紙本墨画

様々な姿態をした鷹の図を、六曲一双の屏風に押絵貼にした作品で、各図に「御綬鷹」朱文長方印、「佐渡掾藤原正吉」朱文方印、「松巖」朱文鼎印各1顆を捺す。

作者の藤原正吉は伝歴不詳の人物であるが、使用印から武人画家ではないかと言われている。岐阜市歴史博物館やベルリン国立アジア美術館に所蔵されている作品は、いずれも鷹図であることから、作者はこれを得意としたものと見られる。

洋 画

吉田彰

3. 『人間 A』

1953年 116.7×90.9cm、油彩、カンバス、額装

『群像 B』

1954年 179.5×96.5cm 油彩、カンバス、額装

『鳥』

1961年 90.9×116.7cm 油彩、カンバス、額装

『群像—「盾シリーズ」・8』

1994年 162.1×130.3cm 油彩、カンバス、額装

『水海田楽「あまじゃんごこ』

1996年 116.7×90.9cm 油彩、カンバス、額装

吉田彰(1931～2008)は、本県の公立学校で美術教師をしながら美術文化協会を中心に発表活動が続けてきた洋画家である。学生時代からすでに同協会の会友となっており、奨励賞も受賞している。作風は抽象から具象と幅広いが、いずれもやや超現実的雰囲気や漂わせるものが多い。

『人間 A』は、第13回美術文化展に出品し、美術文化賞S氏奨励受賞した作品である。



4. 増田孝 『華』

1962年 130.3×162.1cm 油彩、カンバス、額装

増田孝(1936～1997)は越前市(旧武生市)

品を新しく収蔵しました。  
日(日)の2回のテーマ展で展示・紹介します。



2. 藤原正吉 『鷹図屏風』(部分)



3. 吉田彰 『人間 A』



4. 増田孝 『華』



5. 福岡繁樹 『不詳』



6. 鈴木千久馬 『からす瓜のある静物』



7. 上前智祐 『無題』

生まれの洋画家である。二科会に所属して作品発表を重ね、評議員、北陸支部長などを歴任した。また長年金沢美術工芸大学で教鞭をとり、後進の育成にも尽力している。

後年の作品には、人物、風景、静物等を、明るい色彩と軽やかな筆致で描いたわかりやすいものが多いが、初期の頃には本作のように超現実的な雰囲気作品も描いている。増田は10代の頃から、生涯を通して二科展へ出品し続けたが、本作だけは例外的に美術文化展に出品している。



#### 福岡繁樹

##### 5. 『不詳』

制作年不詳(昭和初期頃) 38.0×45.5cm  
油彩、カンバス、額装

##### 『不詳』

制作年不詳(昭和初期頃) 45.5×53.0cm  
油彩、カンバス、額装

福岡繁樹(1903～1950)は福井市生まれの洋画家である。戦前は福井の美術運動グループ「北荘画会」の中心的なメンバーとして活躍し、独立美術協会、帝展、創元会などに出品した。本県洋画壇の草創期から活躍した作家であるが、震災や早世等により残存する作品は数少ない。

#### 6. 鈴木千久馬

##### 『姫薔薇』

1950年 45.5×37.9cm 油彩、カンバス、額装

##### 『卓上静物』

1950年 90.9×60.6cm 油彩、カンバス、額装

##### 『秋果』

1951年 45.5×53.0cm 油彩、カンバス、額装

##### 『からす瓜のある静物』

1950年 79.5×79.5cm 油彩、カンバス、額装

##### 『知床』

1966-67年 112.1×145.5cm 油彩、カンバス、額装

##### 『薔薇』

1977年 116.7×90.9cm 油彩、カンバス、額装

##### 『椅子による裸婦』

1960年 145.5×97.0cm 油彩、カンバス、額装

##### 『臥せる裸婦』

1969年 53.0×72.7cm 油彩、カンバス、額装

##### 『芍薬』

1975年 90.9×65.2cm 油彩、カンバス、額装

##### 『てっせん』

1972年 90.9×65.2cm 油彩、カンバス、額装

鈴木千久馬(1894～1980)は、1972年に福井県出身の洋画家として初の日本芸術院会員となっている。初期にはフォーヴィスム(野獣派)の影響を受け、黒色を中心として描いた重厚な作品が多いが、長い試行錯誤の末、晩年には白色を中心とする独特の様

式を確立した。

ここに図版を掲載した『からす瓜のある静物』は、比較的色彩を多用した中期の頃の作品である。

#### 版 画

#### 7. 上前智祐 『無題』

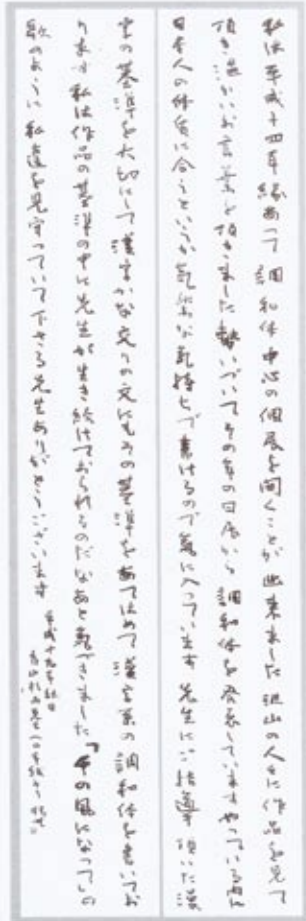
2001年 28.5×38.0cm

シルクスクリーン、未装

他36点

上前智祐(1920～)は「具体美術」に参加し、50-60年代の執拗な点描による絵画作品を経て、80年代以降には、布におびたしい数の縫い目を施した作品や、立体作品へと展開した。緻密な反復作業により、物質感あふれるマチエールを紡ぎだす作品には、近年一段と評価が高まっている。2000年頃からは精力的に版画作品を制作している。これらの作品には上前の生涯の仕事の集大成が凝縮されているといえる。





8. 村寄鴨畦 『青山先生への手紙より』



9. 西山秋崖 『寿慶』



10. 土田ヒロミ 『新・砂を数える』



11. 『彩金御多福面 表金具 / 沈金毛彫匱蓑 裏座金具』

書

8. 村寄鴨畦 『青山先生への手紙より』

2007年 (各) 229.0 × 34.0cm

紙、墨、額装

村寄鴨畦(1925～)は福井県を代表する書家の一人で、日展に所属している。20代の頃から青山杉雨に師事し漢字表現を習得したが、平成14年から、個展や日展で漢字仮名交じりの調和体の作品を発表するようになって以降、調和体を自らのスタイルとして制作活動を続けている。

ここに掲載した作品は、2008年に当館で開催された第39回日展福井展に出品された作品である。



9. 西山秋崖 『寿慶』

1986年 (各) 133.0 × 56.0cm

墨、紙、二曲一双屏風

西山秋崖(1903～1988)は本県の上志比村に生まれ、上京して近藤雪竹に師事、中央書壇で活躍し頂点を極めた。戦後は福井で書会を創立し、書道の普及や人材育成にも力を注いだ。

本作は篆書、行書を対比させた二曲一双の屏風で、没後10年を記念して当館で開催

された遺作展に出品されている。

写真

10. 土田ヒロミ

『KU』シリーズから7点

1962年頃

ゼラチン・シルバー・プリント

『俗神』シリーズから3点

1968-1975年

ゼラチン・シルバー・プリント

『砂を数える』シリーズから3点

1975-1989年

ゼラチン・シルバー・プリント

『パーティー』シリーズから4点

1980-1990年

ゼラチン・シルバー・プリント

『新・砂を数える』シリーズから6点

1995-2004年

インクジェットプリント

計23点

土田ヒロミ(1939～)は2008年に「土門拳賞」を受賞した福井県出身の写真家。1960年代末から、日本の土俗的な文化、ヒロシマ(原爆)、高度経済成長、バブル経済などのテーマで、変貌する日本の姿を撮り続けて、これまでにない「時代」や「人々」の表現

を獲得してきた。またこれらの「徹底的な記録」に踏みとどまる倫理性の高い作品群とともに、近年は、デジタル技術を積極的に活用して、写真の「記録性」を揺さぶる表現にも踏み出し、芸術写真家としての側面も見せている。

工芸(金工)

海野秀珉

『彩金翁面 表金具 /

毛彫沈金携掛 裏座金具』

制作年不詳 2.1 × 2.8 × 厚0.6cm / 1.8 × 2.9 × 厚0.7cm 容彫

11. 『彩金御多福面 表金具 /

沈金毛彫匱蓑 裏座金具』

制作年不詳 1.9 × 3.3 × 厚0.4cm / 14.5 × 3.2 × 厚0.6cm 容彫

海野秀珉は東京美術学校金工科卒業後、帝展を中心に活躍した金工家である。日本芸術院会員で、昭和30年には重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定された。

本作は二組の袋物の表金具と裏座金具で、何れも幸福、長寿、繁栄を連想させるモチーフが丁寧に細工されている。

《イベント報告》

# 「福井の宝 島田墨仙展」

去る3月4日(金)から27日(日)まで、当館では、福井出身の日本画家 島田墨仙の没後初となる大規模企画展を開催しました。

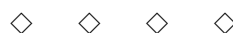
4日の開幕日には、多数の関係者の方々にご参列いただき、開場式を盛大に挙行了しました。



テープカット

また、展覧会の開幕に合わせて、エレベータの完成披露も行い、ご来場の皆様方に初めてご利用いただきました。

この展覧会に合わせて、会期中に開催したイベントは次のとおりです。



## ■親子歴史ワークショップ

「墨仙展で橋本左内の時代を知ろう」

〔講師〕福井市立郷土歴史博物館学芸員 印牧信明氏

〔日時〕3月12日(土) 〔場所〕当館講堂ほか



ワークショップ風景

墨仙は、両親や乳母から隣家の偉人橋本左内を見習うように訓戒されて育ちました。このワークショップは、橋本左内や松平春嶽など幕末維新の福井人を学ぶことにより本展覧会の理解を一層深めていただくこと、小学生の高学年と中学生を対象に開いたものです。

市立郷土歴史博物館の印牧学芸員が、年表やワークシート、漫画などを使って分かりやすく歴史の説明をした後、「島田墨仙展」の展示会場で当館の学芸員が作品解説を行いました。

参加者からは、ワークショップのおかげでとても親しみやすく作品が鑑賞できたと好評でした。



## ■講演会

〔演題〕「島田墨仙と近代の日本画」

〔講師〕東京文化財研究所企画情報部・文化形成研究室長 塩谷純氏

〔日時〕3月20日(日) 〔場所〕当館講堂

東京文化財研究所の塩谷氏に標記のテーマでご講演をいただきました。

墨仙が、大石内蔵助良雄の「致城帰途」を描いたときのエピソードや、橋本雅邦に師事しながら師とは違った繊細な描線での人物画を得意とし、時代の作風に柔軟に対応したことなどが紹介され、参加者は終始興味深く聞き入っていました。

福井にこれほど偉大な画家がいたことを今まで知らなかったという感想も数多く寄せられました。



## ■担当学芸員によるギャラリートーク

3月19日(土)、3月21日(月・祝) 参加者合計 約50名



講演中の塩谷純氏

# お知らせ

◎5月～7月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。

5月9日(月)、23日(月)、30日(月)、31日(火)、6月1日(水)、13日(月)、28日(火)、7月11日(月)

## 貸館情報 [4/22～7/18]

4/22～4/24 ● 第16回川村朴石書作展「木と土と紙の書展」	6/22～6/26 ● 福井県写真作家連盟展
4/28～5/1 ● 第9回樹ノ会絵画展	6/23～6/26 ● 第26回沙久羅会日本画展
5/3～5/8 ● 第9回日本海自然写真大賞展「雲を追いかけて」	6/23～6/27 ● 第64回示現会巡回福井展
5/13～5/15 ● 第39回書法研究石門展	6/24～6/26 ● 第31回鳳友会展
5/19～5/22 ● 第25回白樫会洋画展	6/29～7/3 ● 8-23 渡邊一雄日本画展
5/26～5/29 ● 第6回笑夢の会水彩画展	6/29～7/3 ● Pino&森の仲間たち
6/2～6/5 ● 第20回記念日本画紫陽花展	7/1～7/3 ● 第37回福井県デザインコンクール作品展
6/3～6/5 ● 第43回玄潮会書展	7/1～7/3 ● 第18回移山会書作展
6/3～6/5 ● 第16回福井水墨画壇(こころ、趣展)	7/6～7/10 ● 第37回福井県水墨画協会展
6/3～6/5 ● 福井県立藤島高等学校美術部展	7/6～7/10 ● フォトフレンズ写真展
6/9～6/12 ● 第61回県書道展・県現代書作家展	7/7～7/10 ● 中野千鶴子と藍好家たち展 - 喜寿からの出立 -
6/14～6/19 ● 「TAMA-TEN in FUKUI」	7/8～7/10 ● 第32回書玄会展
6/15～6/19 ● 第4回現代童画会福井地区展	7/14～7/18 ● 福井一陽展
6/16～6/19 ● 第18回福井謙慎木曜会書展	7/14～7/18 ● 鈴木 朗 思い出の写佛・篆刻作品展
6/16～6/19 ● 第24回イーゼル会デッサン展	7/15～7/18 ● 第52回九龍社書展

## 平成23年度 会員募集のお知らせ

詳しくは各事務局  
(電話番号はいずれも0776-25-0452)まで  
お問い合わせください。

福井県立美術館 友の会  
◎年会費 2,000円(一般) ◎特典多数有

福井県立美術館 ボランティアの会  
◎年会費 1,000円(通信費)

## 福井県立美術館 夏の展覧会案内

### 森と芸術展

—美術と博物が語る森のひみつ—

会期◎平成23年7月29日(金)～8月28日(日)

はるかな昔、人間は森に住み、森の恵みを糧に暮らしていました。文明を築くようになってからも、人間は森という故郷に「楽園」の思い出を重ね、ノスタルジアを抱き続けてきました。

古今の芸術作品の中にも、原初の森への郷愁や憧れが数多く表現されています。本展では、森の神話や伝説を描いた作品、情感ゆたかな風景画、メルヘン絵本、植物文様をもつアール・ヌーヴォーのガラス器など、森の魅惑を体現する作品を中心に展示・紹介します。

また美術作品ばかりでなく遠く恐竜時代までさかのぼり、化石等の博物標本を通して現代人のうちにひそむ「森の記憶」を探る展覧会でもあります。夏休み期間中、是非ご家族でご鑑賞ください。



ルネ・マグリット 「白紙委任状」  
1966年 宮崎県立美術館蔵  
©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011